

★極右の席卷はなく、中道が持ちこたえた＝英ガーディアン紙

5月の欧州議会選挙で、独仏などで環境派とリベラルが躍進したことは、EU政治における新たな多元主義を反映している。

ナタリエ・ノーガレデ記者

欧州議会が極右に乗っ取られかもしれないという予測が広がっていたが、マーク・トウェインが自分の死についての報道について語って有名になったように、「大げさに誇張されていた」ことがわかった。ヨーロッパ中の市民は1990年代以来みられなかった数で投票箱に群がった。特に若者が投票に赴いた。そして彼らは右翼ポピュリストの躍進を許さなかった。

政治的变化は疑いなく進行しており、右翼ポピュリズムはなお行き渡っている。しかし実際に起こったのは、環境派とリベラルの大波を含む新しい多元主義がEUの政治に出現したことである。このどれもEUの存続を妨げない。まったく反対である。連立政権の構築は以前よりも困難になるだろうが、制度の麻痺にはつながらないだろう。終末期のシナリオが繰り返されていることを考えると、これは良いニュースだ。

EUの指導者たちが近くこれらの結果を発表するために集まるとき、5億1000万人の集団が最終的にどのようにして危機から脱却したかについて熟考するだろう。EUの存在は自己破壊の危機に瀕していると日常的にいわれてきた。難民危機に続くブレクジット（英国のEU離脱）の最中、凶事の預言者は至るところにいた。

これらの選挙はまた、EUを「敵」と表現し、その崩壊を積極的に奨励してきたドナルド・トランプの仲間たちに肘鉄砲を食らわせた。同じことが、ウラジミール・プーチン大統領にも当てはまる。彼は、西側の「衰退」（プーチンの大好きなスローガン）の結果としてブロックがやがて崩壊すると予測していた。

フランスではマリーヌ・ルペン率いる仏国民戦線が第一党になったが、同党は2014年の前回選挙でも第一党だったことを忘れてはならない。フランスの極右はその地位を固めたというのが本質であって、新たな高みに前進したわけではない。

エマニュエル・マクロンのルネッサンス・リストは22.4%で2番目になったが、フランス大統領選挙の第一回投票でマクロンが獲得した票数に近づくことで、その地位を確立したことも注目に値する。フランスはこの7か月間「黄色のベスト運動」の混乱に支配されていたことを考えると、この数はマクロンにとって抹消ではなく、損害をかなりの程度、制限したことになる。

イタリアでマテオ・サルヴィーニの「同盟」がリードするのはもちろん懸念の種だ。イタリアの選挙で極右がトップに踊り出たのは初めてのことだ。しかし、その結果は予測することができた。それ以上に驚くべき出来事は、中道左派の民主党が復活したことであり、同党は「同盟」の連立相手である「五つ星運動」をやすやすと上回った。

独仏その他の地域での、環境派の前進はヨーロッパの有権者にとって環境問題の優先順位が上がっていることを示している。それはまた、個々の国民国家ではなく、ブロックとしてのEUが気候変動の危機に立ち向かう効果的な行動のための最良のレベルであるという認識を示唆した。

欧州議会の議席は、極右グループとその潜在的な同盟者たち（それには時として極左が含まれる。昨年彼らは、ロシアでの政治犯釈放を求める決議を却下した）に与えられるだろう。しかしもっと重要なことは、これらの選挙の結果は新たに中道主義勢力を力づけましたことだ。 - ALDE（リベラル）と環境派は現在ストラスブールで潜在的なキングメーカーになっている。

ヨーロッパの伝統的な勢力（主流右派と社会民主主義者たち）にとって厳しい結果になった。どちらも多くの国の国内パターンを反映して損失を被った。両方とも多くの国で、国内要因の結果として損失を被った。しかし、ここでも注意が必要だ。ドイツでは、14年間近く政権を握っていたメルケル首相の党が、依然として2位の環境派を8%リードしている。難民危機への対処で彼女が非常に傷ついたのではないかと考えられていただけに、この結果は、屈辱にはならない。

ヨーロッパは複雑な場所であり、28の国内政治舞台の寄せ集めである。過度に一般化する誘惑を避けなければならない。ドイツ（AfD）とスペイン（Vox）の極右が、他の諸国での最近の選挙ほど伸びなかったことでホットしたということが出来るかもしれない。しかしフランスはそれほど安心できるわけではな

く、マクロンは EU 全体の大望を実現するのに苦勞し続けるだろう。

同様に、千票減らしたことで社会民主主義は死んだといえたとすれば、ドイツの SPD またはフランスの社会主義者たちにも当てはまるかもしれません。しかし状況はオランダとスペインでは全く異なっており、そこでは若い社会主義の首相が最低賃金を引き上げ、男女平等を推進する方法を見つけだした。

ハンガリーのビクター・オルバンは、国のメディアの大部分をコントロールしており、再度、勝利したと主張することができる。しかし中欧は右派ポピュリズムの単一センターになっていると性急に語るとは、今度の結果を否定することになるだろう。ポーランドでの親欧派の野党は今年後半に予定されている総選挙で戦うチャンスがあると信じている。その間、スロバキア人とルーマニア人（特に EU 全域に住む外国居住者）は、彼らの国の政府を運営する腐敗した権力網に打撃を与えた。

欧州議会で極右がどのようにして 1 つのブロックにうまく合体かを見極めるのは時期尚早だ。しかし進歩派もこれらの結果から予想されていたより楽観的になることができる。多くの市民が動いて右翼ポプリズムの暗黒の勢力に立ち向かったのだ。ヨーロッパ市民にとって、EU の基本的な価値観や業績は大事にする価値があり、一時の怒りで捨て去るわけにはいかないものであることが分かったのだ。

おそらくヨーロッパの政治情勢の中には、私たちが恐れていた以上に、常識と穏健派がいるのだろう。中道は持ちこたえている。(了)